

死を通して生の大切さを学ぶ意味

藤原 芳朗

The Meaning of Learning the True Importance of Life through Death

Yoshirou FUJIWARA

キーワード：死生，尊厳，死への意識

概 要

現代社会は、可能な限り死を遠ざけ、疎んじ、関わりを少なくしていこうとする風潮が蔓延している。しかし、死は自身が体験できない以上近親者の死等からしか、その意味や大切さは学ぶことができない。私たちは死を意識することで翻って今の生を見つめ、残された生の時間をよく生きていこうと気づくのであるが、死を直視しないことでこのことから疎外されている。いまこそ、死の尊厳性に気づき、死から目を逸らさず生命の有限性を自覚し、死を意識しながら今を生きる意味を感じ取ることができる方法を考えねばならない。

1. はじめに 現代社会と孤独死

2020年代後半以降は団塊の世代が後期高齢者の仲間入りをする時代である。「社会保障と税の一体改革」もこの団塊の世代の社会保障に関する経費を強く意識しての対応といっても過言ではない。

『医療白書2011』によれば、近年は1年間の出生数は概ね107万人程度であるが、戦後間もない時代には250万人を超える出生数が数年連続している。今その世代の人々が65歳以上のいわゆる高齢者となり、10年後には後期高齢者となる。社会保障の面に限らず、この団塊の世代の人々への医療や介護を含めた生活そのものの所謂、処遇をどうするのが問われることになる。独居、高齢者夫婦という世帯が増えつつあるという現状から考えると将来の我が国は、必然的に医療、福祉を中心としてさまざまな問題を抱えることになる。

高齢者の占める割合、とりわけ後期高齢者のそれが高くなればなるほど多病・多死の時代を迎えることになる。このことは、ただ単に毎年約1兆円ずつ増加する医療費の高騰もさることながら社会保障費、介護問題等問題が山積する要因となる。例えば孤独死の問題がある。現在の豊かさの背後には太平洋ベルト地帯へ

の夥しい人口流入があり周辺地区から都市部への人口集中があった。そして、バブル経済の終焉後に残されたものは無縁社会の拡大しかなかった。大都市圏で孤独死を防ぐことはもはや不可能であり、孤立無援の生活からの脱却は困難とされている。数十年以上も音信不通の親せきに、名前しか聞いたことのない茶毘に付された遺骨が届いても、また、今更の如く死亡通知をもらっても埋葬にも礼拝にも苦慮するしかない。このような孤独死や無縁死はこれからもさらに増えていくに違いない。血縁の希薄化を嘆いていても事態は一向に改善しない。新たな手立てを模索しなければならないときを迎えている。引き取り手がない遺体をどうするかではなく、孤独死や無縁死のように家族や親せき縁者に看取られることなく死んでいくことの抱えている意味をどうとらえるかが問われなければならない。一人で死んでいくこと、誰にも看取られることなく死んでいくのが当たり前のような社会は、逆に言えば死に往く人の往生するさまを見ない社会なのである。

孤独死が急増するとともに、『2012/2013国民の福祉と介護の動向』の巻末資料（世帯数）によれば、平成2年には単独世帯の割合が20%を超え、現在では25.2%となり、夫婦のみの世帯も平成11年に20%を超えて以降、着実に増加している。子供や孫と生活を共にすることが殆どない暮らしが一般化している。日本の場合は、一旦高齢者施設に入れたら入れたままであり、施設からの家族会開催の呼びかけにも顔を出すことは

(平成24年11月19日受理)
川崎医療短期大学 医療介護福祉科
Department of Medical Care Work, Kawasaki College of Allied Health Professions

少ない。親の金銭や財産は勝手に使い果たすが、介護が必要な状態になれば市役所に出向き、「行政の手で何とか」と訴えるケースも少なくないという。上記のように、3世代同居が減り世帯規模の縮小が続いており、老いて病んでいく高齢者や日常的な介護が必要な要介護者を手元に引き取り一緒に生活するということの忌避がみられるのが今日の社会となっているのである。

さて、2012年の敬老の日のメディア報道では我が国の65歳以上が3,000万人を超え、総人口における65歳以上の占める割合も24%を超えた。若年者人口は増加に転じることはなく高齢者人口のみが突出している。また、政府の方針により入院患者の在院日数の減少傾向は一層拍車がかかり、高齢者をケアする場所も施設から在宅へと転換してきつつある。しかし、私たちが今問わねばならないことは、医療費の高騰を含めた社会保障の費用をどうするかではなく、死の前のステップや時間をともにしないことが常態化している家族との間で、高齢者の死のありようや高齢者の終末期の在り方について、どうするのかについて考えることをしなければならぬ時期を迎えているのではないかということである。

2. 死の前段階にある「老い」から「死」への移行の状態を見せる意味

交通事故や突発的な事件に巻き込まれることでもない限り、何の前触れもなく人は突然、生から死へと転落することはない。人間はやがて死に至る存在として生を享けている。生きていることの果てに死があり、生きているからこそ死がある。生きていないのならば死はない。生と死は連続の関係性のなかにあり、生と死が個々別々に存在するのではない。

繰り返すが生の状態からいきなり死を迎えるわけでもない。通常、死の前には病があり老いがある。このような一連の連続性を間近で時間を共有できなくなっているのが現代社会である。

ところで、人が死ぬことは亡くなることであり、無になることであろうと一般的には云われる。外界とは遮断され暗闇の中で深い静寂に包まれながら眠りにつくような状態が延々と続く。何も考えず、何も聞かえず、見えず、匂わず、また何も感じることもないブラックホールへ音もなく落ちていくような無の世界であろうと想像できる。

では、死イコール無なのか考えてみる。死者の扱いとしては、世界の各地で土葬、水葬、火葬、鳥葬、風

葬などそれぞれの気候風土や宗教観に合わせた弔いの様式があり無に帰さないための方法としては木乃伊や即身成仏ということもなされてきた。

「死んだ人間は年齢を取らない、とも言う。たしかに死ぬことによって、時間の支配からは抜け出したであろう。だが、それでは死ぬことによって永遠のもとに存在することになるのであろうか。そうとすれば、死は無になるのではなく、永遠界に移ることなのであろうか。死に関してはわからないことばかりであり、このわからなさに関する恐れと不安がいろいろな憶測を引き起こしているとも言える」¹⁾。このように、頭で理解してきたつもりではあるが死ということ、生命ということは不明な部分が多い。私たちは肉親や親戚縁者といった大切な存在を彼岸へと見送ったとき、はじめて失った存在の大きさや意味を感じ、寂寥感とともに死の厳しさや辛さも痛いほど感じる。とりわけ、時間や空間をも共有してきた身近な存在を失うことはその部分だけが空間に穴が開いた状態となる。死を考えると、身体的に呼吸停止、拍動停止、瞳孔散大という3つの兆候だけで人間の死を推定することとは異なる何か死にはある。死は身体的には刺激に対しても反応しない状態となり血流も止り、腐敗が始まるが、心の面、遺伝子の面で次世代へと受け継がれる命のリレーは存在する。物質としての死体は焼かれ埋められることで原形をとどめない。しかし、継承され続ける目に見えないものもある。逆に言えば必要なものを次世代へと継承した時点で生命としては終焉のときを迎えているともいえる。

さて、老いの時期は密かに忍び寄ってくる。介護が必要になったときが老いの到来ではなく、今まで当たり前前にできていたことができなくなる。見えていたもの聞こえていたこと感じていたことが少しずつ感覚的に鈍化していき、自分自身で心身の変化を自覚せざるを得なくなる。代謝、分泌、反応といった生理的な老化は目に見えない。しかし、ある種の出来事をきっかけに機能が低下していることを悟る。この老いてきた状態、死の前にある老いの状態像を家族に見せる必要がある。

現代社会は生・老・病・死のすべてが自宅以外で行われているという実態があり、病院で死を迎え、物言わぬ遺体となった姿で直葬と言われるような火葬場に病院から直行するスタイルが定着しつつある。もはや「畳の上で死ねない」が当たり前のようになっている。

「死はかつて在宅での看取りを通じて、死に往く者

と送る者との双方が係わり合い、協調し合い、人生の節目として引き継がれました。それは、死を納得する心理の過程だといってよいでしょう。看取る側が向ける愛の対象が、ローソクの炎のようにふっと消えてしまう。「諸行無常」の事実が実感される瞬間です。悲しみという情動が発動され、看取りの苦労が記憶に刻印される「学び」の瞬間でもある。だが、死体は目に触れないようにされることで死が隠され、その意味が失われた社会では、教育的であっても悲しみのような「マイナス」の情動をとまなう体験は忌避されます。²⁾と、人生の最期に学ぶ機会を与えようとしてくれている死に往く人の思いが水泡に帰するのである。現代社会はここに述べてある在宅での死の看取りの情景はない。

嘗て家族は、死に往く人の近くで、老いが進行し、病を得て少しずつ身体機能が低下して食べる量が少なくなり、意識レベルが低下して、今まさに生命の灯の消えようとする大切な時間を共にすることが当たり前であったが、病院死が80%を超える今はそうではない。このように死に往く人に関わりを持たないということはどういうことを意味するのであろうか。

3. 生の有限性の理解と死の凝視

自分より先に次の世界へと往くモデルとしての祖母や両親の死に往く姿を考えると、例えば、老いさらばえて徐々に他者への依存が多くなり、身体的には痛みや異常の訴えがふえ、食が細くなり活動性が低下していく。また、精神的には意志の発動性が低下し、自分で判断する場面が減り、メリハリがなくぼんやりとして一日を過ごすようになる。やがて、身体の衰えと符合するように気分は抑うつ的となり家や居室、布団からも出なくなり生活レベルも意識レベルも低下していく。このような実態に対し看病や介護をするでもなく、ともに暮らすことなく自分には関係のないこととして捉えて生きることは、他者の生き様から死を自覚することができなくなることに他ならない。

私たちは死に向かって歩みつつある現在進行形の時間の中に存在しており、やがては死ぬ存在であることは臆に認識している。しかし、できるなら死は遙か遠くにいてほしいと願っている。そして、ともに暮らす肉親の死によって死を意識する。しかし、死に往く人と生活を共にしない人間には、生の状態から死の世界へ足を踏み入れることの生命の状態の変化がつかめないうことになる。死に対するイメージすらわなくなるのではないだろうか。つまり、生と死の関係における

死の位置がわからない状態になると思料される。

要するに家族が高齢者等の死を看取るということは、生き様を見つめ、生の状態から死の状態へと移行する途中を共に生きるということのなかで生を願い、また、やがて生の後に来る死を理解することである。死という状態の前にある老いの時期を共に過ごさないにしても、高齢者の生活に何らかの形で関与することをしないことから死の持つ意味としての生命の大切さはおよそわからないに違いない。

さらに言うなら、誰も死というものを体験できない以上、身近な人の死から学ぶ以外に方法はないのである。病院、特別養護老人ホーム、終末期の痛患者などのお世話をしているホスピスの医師や看護師を含めた病院・施設職員などを除いて日常的に死を感じることはない。死は穢れたものでも自分には関係がないものでもない。私たちは死を意識しなければ今存在する生の世界を惜しむように慈しむように生きることではできないのである。生の有限性を教えてくれるのは死でしかない。しかも自分のそば近くで生から死の世界へと移っていく人間の死にざまを見て感じなければ、生は限りあるものであり、またその大切さや持っている意味に気が付かないのではなかろうか。

IC業界の立役者でApple創業者の一人でもあるスティーブ・ジョブズ氏がスタンフォード大学でスピーチした時の内容として「私は17の時、こんな言葉をどこかで読みました。確かこうです。「来る日も来る日もこれが人生最後の日と思って生きるとしよう。そうすれば必ず間違いなくその通りになる日が来るだろう」。それはわたしにとって強烈な印象を与える言葉でした。そして、それから現在に至るまで33年間、私は毎日鏡を見て自分にこう問いかけるのでした。「もし今日が自分の最後の日だとしたら、今日やる予定のことを私は本当にやりたいのだろうか?」。それに対する答えがノーの日が幾日も続くと、そろそろ何かを変える必要があるなど、そう悟るわけです。自分が死と隣り合わせにあることを忘れずに思うこと。これは私がこれまで人生を左右する重大な選択を迫られた時には常に、決断を下す最も大きな手掛かりとなってくれました」³⁾とスピーチしている。

私たちは命こそが大切なものとして捉えている。日常的に口にするときは、例えば「命の次に大切なものは……」というように、これほど生命は大切であるとしながらも一日一日を大切にはしていない。それは、死を意識しないからに他ならない。生のみを見て死は

遠くにあるもの、健康な自分にはおよそ縁のないものとして自己意識の外に置く限り、生が意味あるものとして存在しなくなるのである。

ところで、倫理学の最大の命題は「よく生きるために何をなすべきか」を問うことと言える。この「よく」の考え方は、良く、善く、好く、能く、佳く等さまざまあるにせよ、よくいきるということを仮に「悔いなき人生」と置き換えるならば、やり残したことの無い人生であるために今、何をすべきかを自分に問うということであり、満ち足りた人生といえるためには早急になすべきことは何であるかを問うことになる。そのためには死は遙か彼方の遠いところにあるのではなく、いつも自分のすぐ近くにあると認識し、時間を有効に使うことで不満足感を払拭していくことである。このような関係にあるとして死と生を考えるならば、私たちは死というものは穢れたものでもなく、人目をはばかるものでもなく、死は尊厳を保たれて、その大切さを改めて見つめ直さなければならないのではないだろうか。

4. 生は愉しみ、死は苦であるのか

生と死は表裏一体である。死を苦とした場合、生は楽であり、愉快なものでなければならない。しかし、「人間は何のために生きるのか」と問われたとき明快に答えることができるであろうか。幸せに生きたい、自由に生きたい、病気の人は健康に生きたいと希求すれど、数々の制約の中で汲々として生きるのが人間ではなかろうか。青少年の自殺や人知れず死んでいく高齢者の報道は痛ましい。生きていく愉しみを見出しそれに邁進できる人は少ないであろう。ソクラテスは「食べるために生きてはならず、生きるために食べるべき」と言うが、果たしてそうであろうか。中世の貴族ならともかく、人は皆食べるために労働をし、その労働の中に喜びを見つけ出し、また、見返りを求めない無償の愛の行為としての子供の成長に喜びを感じながら子育てを生きがいとして生きているのではないだろうか。

その一方で、死ぬことが生きがいであるという人もいる。極端な例のようであるが、討ち入り前の赤穂47士は明らかに主君の敵を討つためにのみ生きている。主君の恥辱を晴らし、仇を討つことこそが生きがいである。その先に死が待っていることは百も承知で今を生きている。明日死ぬために今日を生きているのであり、どちらかといえば生よりも死に重きが置かれており、まさに、生と死は隣り合わせの状態である。生は愉しみ

ではなく苦であり、死が喜びなのである。一刻も早く本懐を遂げて死の世界へ往きたいと考えているのであり、いわば死ぬ愉しみのために生きているのである。

また、第二次大戦末期の人間魚雷乗組員や敵艦の沈没をねらい多量の爆弾を搭載して飛行機ごと体当たりする航空兵。この場合も、死ぬことと生きることは表裏一体ではなく同一線上にある。明日死ぬために今日を生きているのである。死を怖れないからばかりではない。死の恐怖を超えた悲惨な愉しみが待っていると考えた人もいたのであろう。

現代社会において、これらのことについて思惟するとき、我が国の自殺者がここ数年3万人を下回らないことからわかる。ロシアについて自殺者の数は世界第2位である。自らが自らの命を絶つという行為は例えようもない最大の覚悟、決意がなくてはできない。自殺という行為によって死にゆく人も今の生の世界に愉しみを見いだせず苦のみを見、逆に死の世界に苦からの解放を求めて死を選択するのであろう。したがって、残念ながら、必ずしも生は愉しい世界で死は苦しみの世界であるとは言い切れないのではないだろうか。

5. 死の尊厳性と死から生を考えること

死に往く人は用済み、有益性の全くない物体に帰するのではない。死んだとはいえず冒すことのできない価値あるものといえる。とりわけ、「日本人にとって人の死は単なる死ではなく、「死んで報いる」「死んだ後も子孫を見守る」など、生死観に連なる靈魂の存在を前提にしている」⁴⁾とあるように、靈魂の存在は脇に置いて、生と死の連続性・つながりと尊厳性は無視するわけにはいかない。大切な人が死んだ時期に相前後して子どもが誕生した場合、しばしば死者の「生まれ変わり」という表現をする場合がある。このように死の側から生を考えることをすることもある。それは、私たちは死者を悼み生と死の連続性のなかにいるからである。生と死は互いにつかず離れずの微妙な関係を保ちながら生の背後に死が潜んでいる。いわば表裏一体や隣り合わせの関係である。

さて、死の尊厳性を考える前に、人の尊厳について言及するならば、ピコ・デッラ・ミランドラが自由意思による自らの決定が人間の尊厳を形成するという主張をし、パスカルは、『パンセ』のなかで「考える葦。私が私の尊厳を求めなければならないのは、空間ではなく、私の考えの規整からである。私は土地を所有したところで、尊厳を増すことにはならないであろう。

空間によっては、宇宙は私をつつみ、一つの点のようにのみこむ。考えることによって、私が宇宙をつつむ⁵⁾とし、人間の尊厳を思考に求め、人間の考えるという行為にこそ尊厳があるとした。

カントは「人間性それ自体が尊厳である。なぜなら、人間はいかなる人からも（他人によっても、また自己自身によってさえも）単に手段としてのみ必要とされることはできず、常に同時に目的として必要とされねばならないからである。そして、この点にこそまさに人間の尊厳（人格性）が存在するのであり、そのことによって、人間は世界における人間以外の、しかも必要とされることができ他のすべての存在者を、したがって、すべての物質を超えている⁶⁾（IVS, 462）という。カントは他のものと比較できないほどの価値を持つものとして理性的存在（人格）をとらえている。等価物の存在を許さない絶対的価値（尊厳）が人間にはある。人格は存在することによってそのことが目的となる存在である。したがってそこには常時目的として手段としてではなく取り扱われなければならないのであるとしている。理性的存在としての人間はかけがえのないほど、唯一無比の存在であるという。

人間の尊厳をこのように捉えるとき、死に往く人の尊厳はどう考えるべきであろうか。そもそも尊厳とは広辞苑では「尊くおごそかで冒しがたいもの」と述べてある。いましも死を迎えようとしている人間に対してこそ、この表現はふさわしいと考えるが、一方で有用性だけで評価する人々にとって役に立たないものに価値を見出すことはない。したがって、死に往く人には尊厳を覚えないといえる。

しかし、生と死は合わせ鏡のようなものであって、生と死は別個には存在しない。よい生を送りたいのであればよい死にざまでなければならず、よい死を迎えたければよい生でなければならぬのである。死を軽んずるものに生を語る資格はない。限りある生を知るには死でもって知るしかないということは、死に対しておごそかに向き合うという姿勢がなくてはならない。ここに死への尊厳が生まれる。

「その死の迎え方が人間らしいものであったなら、きっと残された者たちの悲しみを癒し、生きていく勇気を与えてくれるに違いない。死は、死んでゆく者だけのものではなく、残された家族も巻き込んだものである。死の看取りにしても、死をどのように迎えるかは、看護婦のものでもなく、医師のものでもなく、まさに家族のものに違いないのである。かけがえのな

い人の命であるからこそ看護の基本的使命ともいうべき人間の尊厳を中核として、その人らしい「死の瞬間」を尊重していきたいと願っている。死を迎えるその時までにはやるべきことをやると実感し、むやみに苦しまずに、家族に見守られ、生きていてよかったと感謝の気持ちが湧き、いのちに対する畏敬の念が感じられるような満足感のある「死の看取り」にしたいと思う。」⁶⁾と看護師であり自分の父を見送った経験から述べている。このように、死から学ぶという姿勢こそが生きている自分や家族の生きざまを決定付けるということを感じ取らなければならない。

6. まとめ 死から学ぶ

現代社会に生きる私たちは死ということに対して、ともすれば関わりたくない、遠慮しておきたいと考えている人が多くなってきた。生にのみ光を当て、まるで死というものが存在しないかのごとくふるまっている。しかし、これは本来の姿から乖離したものであり死を考えないところに生はない。古今東西の宗教家は安らかな死を希求し、そのためにどのように生きるかに心を砕き、念仏を唱え、祈りをささげ、荒行を続けてきた。しかし、それでも死は到来し、すべてを彼方へと持ち去るのである。生に拘泥する者ほど死から目を逸らし生の有限性に目を向けようとしない。逆に、死に直面した経験がある人は生きることに真剣に向き合う。一歩間違えば死と隣り合わせという状態を経験することで生きることの喜びに初めて気が付く人が多いのである。しかし、現在も内戦状態にある中東諸国のように戦車の轍を身近に見るなり、砲弾の轟音を耳にしなければ死を意識できず、また、それによる生の喜びに気づかないというのではこれも悲しいことである。臨戦状態や戦闘状態でしか死は意識できないものではない。先の東日本大震災をどのように生かしていくかを考えればよい。復興は道路や港湾、建物だけではない。人々に心に、生命には限りがあるということを教える機会であり、また、正しく教えなければならないのである。

私たちは、自分自身の死の体験ができない以上、そこから死に関することを学ぶことはできない。しかし、現代社会は、上述したように死からの逃避、死を遠ざけることに腐心する状況が蔓延していることで、身近な肉親や他者からも学ぶことができないとなれば、死の不安や恐怖から逃れることや生命の重要性の理解ができるのであろうか。また、死の持つ側面として、近

親者の死を経験し、苦しみに耐え死の重さを味わい乗り越えてこそ以後の生活を切り拓き、逞しく生きていくことができると考えても差し支えないだろう。

ところが、エピクロスの言うように「死は我々には無関係なものである。なぜならば、我々が存在しているということは、死は存在せず、死が存在するときには、我々は存在していないからだ⁷⁾」と考えているのが今を生きる者たちである。大災害が同じ国内で発生し夥しい国民が大海原の藻屑と消え、被災して明日をも知れない塗炭の苦しみの中にも、どこか他所の国で起きたかのような感覚しか持たない人々はある。まるで、「ケ・セラセラ」, 「そんなの関係ない」といいきれののだろうか。科学万能の現在では地獄、極楽の話に子供たちは見向きもしなくなったと聞く。死の準備教育の必要性も説かれることがあるが、限りある命の大切さについて身をもって教えるという家庭教育の根本が蔑になりつつある今、死に対して正対する、正面から向き合うということをしなくなり、道徳心すら失いつつある現代社会を生きる人々のために、家庭教育に代わってどこがそれを受け持つのかを明らかにして

いかなければ今度は人々の死への不安を餌に、またぞろのごとく魑魅魍魎が跳梁跋扈し、大きな無差別殺人が発生しないとも限らない。

*カントからの引用は慣例によりアカデミー版カント全集の巻数と頁数を本文中に記した。なお翻訳については岩波書店版カント全集1999年を参照。

7. 引用文献

- 1) 濱田恂子：死生論，東京：未知谷，pp. 49, 2004.
- 2) 大井 玄：人生の往生，東京：新潮社，pp. 16, 2011.
- 3) 大津秀一：最高の最期の言葉はありがとう，7月号，東京：文藝春秋，pp. 297—298, 2011.
- 4) 板橋春夫：生死，東京：社会評論社，pp. 36, 2010.
- 5) Pascal：パンセ，前田陽一，由木康訳，東京：中央公論新社，pp. 204, 1996.
- 6) 城ヶ端初子：生と死の生涯教育，東京：学文社，pp. 217—218, 1999.
- 7) デイオゲネル・ラエルティオス：エピクロス主要学説，ギリシャ哲学者列伝（下）第10巻，加来彰俊訳，東京：岩波書店，pp. 300—301, 1994.